

京都大学	博士 (社会健康医学)	氏名	広崎真弓
論文題目	Positive affect as a predictor of lower risk of functional decline in community-dwelling elderly in Japan (ポジティブ感情の有無が地域在住高齢者の日常生活動作低下の予測因子となる)		
(論文内容の要旨)			
<p>これまで、健康に影響を及ぼす心理的要因として、主にネガティブな感情が研究され、抑うつが高齢者の日常生活動作 (ADL : Activities of Daily Living) や認知機能の低下、死亡率の増加に関連することが報告されている。世界保健機関の推計によると、2030年にはうつ病が個人や社会に影響を与える疾病の第1位に挙げられており、今後ますます重大な社会問題となることが予想される。疫学研究において、うつ症状は主に、ネガティブ感情の有無とポジティブ感情の有無の両方をたずねる質問紙によって評価されている。ところが、近年うつ症状の中でもネガティブ感情が多いということより、ポジティブ感情が少ないということが、高齢者の死亡率に影響を及ぼす要因であると指摘され (Blazer and Hybels. J Am Geriatr Soc 2004)、ポジティブ感情の重要性が注目されつつある。もしそうであれば、これまで報告されてきたうつ症状とその後の健康状態との関連は、ポジティブ感情の有無によるものである可能性が浮上する。しかしながら、我が国においてポジティブ感情に注目した検討はまだほとんど行われていない。</p> <p>急速に高齢化が進む我が国において、高齢者の健康寿命をいかに伸ばせるかは重要な課題である。そこで本研究では、地域在住高齢者を対象に、ポジティブ感情の有無がADLの低下と関連がみられるかどうかについて、縦断的に検討することを目的とした。</p> <p>対象は、高知県T町の65歳以上の地域在住高齢者である。2006年 (ベースライン時) に1,678名の住民に対して質問紙調査を行い、完全回答の得られた1,043名のうち、基本的ADL (歩行、階段昇降、食事、着替え、トイレ、入浴、整容) が自立していた780名を対象に、2年間の追跡調査を行った。2年後に調査への回答が得られた505名を解析対象とし、ベースライン時のポジティブ感情と2年後の基本的ADLとの関連について検討を行った。</p> <p>ポジティブ感情の評価は、高齢者の抑うつを評価する質問紙である Geriatric Depression Scale の15項目版 (GDS-15) を用いて行った。GDS-15は、ポジティブ感情の有無をたずねる5項目とネガティブ感情の有無をたずねる10項目から構成されている。本研究ではポジティブ・ネガティブそれぞれ別に合計得点を算出し2年後の基本的ADLとの関連を検討するとともに、各項目に注目した検討も行った。2年後の質問紙調査において、基本的ADLの7項目 (歩行、階段昇降、食事、着替え、トイレ、入浴、整容) のいずれかにおいて、何らかの介助が必要となっている場合、基本的ADLの低下とみなした。</p> <p>調査の結果、2年間で72名 (14.3%) に基本的ADLの低下が見られた。基本的ADLの低下を目的変数とし、ポジティブ感情の得点を説明変数としてロジスティック回帰分析を行ったところ、年齢や配偶者の有無、既往歴などの交絡因子を調整しても、ポジティブ感情がある人ほど基本的ADLが低下しにくいという関連</p>			

が見られた。さらに、ネガティブ感情の有無を調整しても、ポジティブ感情と基本的ADL維持との関連は有意に残ることが示された (オッズ比 (OR) 0.66, 信頼区間 (95%CI) 0.50-0.89)。ポジティブ感情の項目の中でも、人生に対する満足感や、幸福感、活力を感じているか否かが基本的ADLの維持と有意に関連していることが示された。しかしながらネガティブ感情については、交絡因子を調整すると基本的ADLとの有意な関連はみられなかった。

以上より、うつ症状の中でもポジティブ感情の有無がその後の基本的ADL低下の予測因子となることが示され、地域在住高齢者の健康維持にポジティブ感情が重要な役割を果たす可能性が示唆された。今後、心理的要因が健康に及ぼす影響を検討する際、もっとポジティブ感情に注目した研究が必要であると考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

これまで、抑うつが高齢者の基本的な日常生活動作 (BADL : Basic Activities of Daily Living) の低下や死亡率の増加に関連すると報告されているが、近年、うつ症状の中でも、ネガティブ感情よりポジティブ感情の有無が高齢者の死亡率と関連するという報告がある (Blazer and Hybels. 2004)。本研究では、地域在住高齢者を対象に、ポジティブ感情の有無とBADL低下との関連について縦断的に検討を行った。

対象は高知県T町の65歳以上の地域在住高齢者で、2006年にBADLが自立しており、かつ2年間追跡調査ができた505名である。高齢者の抑うつを評価する Geriatric Depression Scale の15項目版を用いて、ポジティブ感情とネガティブ感情それぞれの合計得点を算出し、2年後のBADL低下との関連をロジスティック回帰分析により検討した。

2年間で72名 (14.3%) にBADLの低下が見られた。年齢や配偶者の有無、既往歴、高次の生活能力などを調整しても、ポジティブ感情がある人ほどBADLが低下しにくいという関連が見られた (オッズ比 0.66, 信頼区間 0.50-0.89)。ネガティブ感情については、交絡因子を調整するとBADLとの有意な関連はみられなかった。

以上より、地域在住高齢者の健康維持にポジティブ感情が重要な役割を果たす可能性が示唆された。

以上の研究は、地域在住高齢者の抑うつの実態解明に貢献し、老年医学に寄与するところが多い。したがって、本論文は、博士 (社会健康医学) の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、平成25年1月7日実施の論文内容とそれに関連した諮問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日以降